

第6回高知県社会教育委員会会議概要

令和6年8月28日（水）10:00～12:00

高知県立塩見記念青少年プラザ 3F会議室

出席委員（斉藤雅洋、川上確也、佐竹真紀、
徳増千里、吉田友一、眞鍋大輔、
森岡千晴、岩井拓史）

1 開会（10:00～10:03）

【委員長挨拶】

今回の社会教育委員会第6回より、いよいよ提言案の検討に入ることになった。今日はあくまでも提言案の頭出しであり、これまでの9名の委員の発表内容の総括や振り返りをしながら自由に協議をしていきたい。今回も変わらず活発な発言をよろしくお願いします。

2 議事（10:03～11:55）

（事務局）

一提言案内容の説明ー

はじめに（委員長）

第1章 高知県の社会教育と若者世代をめぐる現状と課題（事務局）

第2章 「これからの社会教育と若者世代」に向けた委員からの提言

1 子どもの育ちと学校の役割

2 若者が活躍できる環境と地域の役割

3 社会教育への期待

第3章 若者の地域参画をつくる社会教育振興のあり方

1 施策の方向性

2 施策の推進方策

おわりに（委員長）

（委員長）

- ・「はじめに」と「おわりに」の部分は、第1章から第3章までが、ある程度出来上がった段階で執筆予定。

はじめに：テーマ設定の経緯やこれからの社会教育と若者世代というテーマのもとで、これまで委員会でどのような協議を重ねてきたのかをまとめる。

おわりに：到達点と課題として、この2年間の協議でどこまで達成でき、どこが不十分であったかをまとめる。

- ・第2章：事務局と協議の上、各委員の発表で社会教育に対する期待に関わる部分が強調されていたのではないかとということで、地域や保護者の役割も含めて、これからの社会教育に対する役割という意味で表記のような見出しをつけた。

- ・第3章：提言の中核の部分。発表内容を十分に踏まえ網羅できているか不安な部分もあるため、施策の方向性、推進方策の部分に関して意見をいただきたい。

（委員）

- ・知事の県政報告会において、人口減少対策として女性の県外流出を引き留めたいという話があったが、高知で女性が産み育てるためには、教育がよくないと引き留められない。

(例) 転勤先の教育環境がいいので高知に帰ることになっても、家族はそのまま転勤先に残る。

- ・高知は教育の選択肢がないため女性が県外に出てしまう現状がある。

教育現場を変え、女性が産み育てやすい環境をつくるというのが大事なのではないか。

→第3章(1)の施策の方向性

(委員)

- ・教育の多様性・選択肢を増やすことが必要。

偏差値の影響が強い教育に沿って進むだけでなく、自分自身の可能性を広げるために異なる選択をする子どもたちが出てくることも必要なのではないか。

(委員)

- ・その人だけの個性を発揮できる教育にならないと子どもたちがしんどい思いをしてしまう。

(例) 1度県外に出たときに、高知に嫌な思い出しかないに戻ってこない。

学校が楽しく、地域の人たちに愛されて育った子は高知に帰ってくる。

(委員)

第1章 高知県の社会教育と若者世代をめぐる現状と課題

- ・教育の選択肢を増やすということを盛り込む。

社会教育に携わる人が減少しているということは、学校教育で今まで教えてきたことを変える必要がある。

要因：当事者意識の欠如、人任せで済ませている（主体的でない）。

いかに子どもを楽しませるかという従来の教育をしている限り、常に子どもはお客様であり、自分自身の学習の主体者にはなれない。

→自由進度学習等を推進し、子ども自身が学習の主人公であり、先生は支援者という方向にシフトしていく必要がある。

- ・社会教育を担う若者予備軍となる子どもたちが、より自発的に自分が社会をつくる当事者だと意識するために、多様性のある学習方法が必要。
- ・最終的な着地点として、社会教育としてどのようなアプローチができるのかを考えないと、今までの方法をとる限り、青年団の問題や教育現場での問題は解決できない。
- ・社会教育の視点から小中学校に働きかけ、多様性のある学習を先生にも意識してもらう必要がある。

(委員)

- ・現時点で、教育現場において魅力的なコンテンツや、思わず入学したいと思うようなキャッチーなものはあるのだろうか。

○高知県の魅力を生かす

(例) 高知市では2001年から交流してきた渋谷区との間で、このたび文化観光の協定が締結された。来年度の渋谷区の小中学校の修学旅行の受入れや、渋谷区の学校給食に土佐料理を提供する予定。

→自然学習も含め高知の魅力的なところを発信していけるのか、いけないのか、一過性のものになってしまうのかこちらの手腕が問われるところ。

- ・移住してきた立場としては、自然の中でというところが1番価値があると思う。

- ・素人目線で考えたとき、教育のプロフェッショナルが集まっても教育がずっと変わらないのはなぜだろうと感じる。
- ・主体的にやっていくための方法をどうするかが課題。実際にどのようにするのかというところがきちんと浸透しているかが分からない状況。到達進度等もしっかりとフィードバックしないといけない。

(委員)

○きっかけづくりの大切さ

(例) 夏休み体験パーク（地域の小中学生が、大学生が企画した体験ブースを回って色々な体験をするイベント）

- ・大学生同士が呼びかけて、わざわざこのために高知へ帰ってきてくれる人もいる。
- ・子どもたちのために大学生が自分たちで企画し実行する。
まさに主体性の賜物、主体性の発揮である。
- ・活動の中でどういう体験をして、それが自分と人生にとってどういう価値があったのか、度合いは人それぞれであるが、またやりたいと思うきっかけづくりが大事。

(委員)

第2章（1）子どもの育ちと学校の役割

- ・家庭教育に多少なりとも触れたほうがいいのではないか。

(委員)

- ・15歳から39歳という家庭教育をしなければならない年齢をターゲットにしているので、家庭教育は外せないと思う。
- ・家庭教育も学校教育も思いを同じにして、共に進んでいくことが大事。

(委員長)

- ・家庭の教育力が衰退し、学校にかなりの負担や負荷がかかっているということや、学校と家庭がうまく調和できずにいるということがよく言われている。

(委員)

- ・学校に任せ過ぎている親が多いのではないだろうか。

(委員)

○現代の課題：個人個人になってしまい、人と関わろうとしないから社会教育が衰退していく。
その要因の一つがスマホの出現。子どもたちはスマホネイティブ世代になっている。

(例) 石井光太著書「ルポ スマホ育児が子どもを壊す」

- ・スマホを見て育ってきた子どもが、リアルなものに対して、汚い・怖いと感じるようになってきた。
- ・中学生を保育園に連れていった際「子どもが自分に付いてきて、ゾンビみたいで気持ち悪い」「服を汚されるから嫌だ」といった、今までとは違う様相が見られるようになってきた。
- ・動画を見せたら子供が泣かないので、動画を見せて育児をしている親がいる。
- ・保育園や幼稚園に入っても、子どもが受け身になっており、コーチやファシリテーターが何かを提供してくれないと遊び方や楽しさが分からないという現象が起きている。
→これからの若者世代を考えるとときには、社会教育だけで考えるのではなく、このような

現代課題の面からも見ていかないと根本解決にはならないのではないか。

- ・手をかけ過ぎてしまうという、現代的ではない古典的課題もある。

(例) 朝起こすのは何歳でやめますかという議論

→社会教育を担う若者がどう育ってきたかということも、根本的な一つのテーマとなる。

(委員)

- ・幼児期は遊びが学び。自分で主体性を持つということが大事。

(例) 土日に YouTube を見るのが楽しいので幼稚園が面白くないという子どもがいる。

高知ではあまりないかもしれないが、都会に行くほどそういう傾向があるのではないか。

(委員)

- ・子どもは脳が成熟していないためスマホに依存しやすいということを理解し、時間のルールを作り使用している家庭もあれば、ルールなしで使用している家庭もある。

スマホ依存の弊害：生活リズムが狂う、睡眠時間が減る、勉強ができない、いらいらする、トラブルを起こす。

→現代的な課題

I C T利用の裏にある生活リズムと依存性の問題について、十分な説明がないまま I C T教育を進めてしまっている。

(委員)

第1章 高知県の社会教育と若者世代をめぐる現状と課題

- ・現状と課題の部分に厚みを持たせないと、この後の提言が意味を持たなくなってしまうのではないか。
- ・今回設定した 15 歳から 39 歳は、まさにスマホを使い出した世代。家庭での過ごし方の変化や、親世代の意識の変化など、先行研究も含めたいろいろな視点を盛り込んだほうがいい。
- ・活動の中で感じる主体的な意識のなさ・意識の低さ。

(例) ある市ではこの世代に何かを投げかけると大抵みんな「分かん」で返してくる。

「分かん」のまま、子どもの教育も社会教育も地域のことも含めて全て終わらせてしまい、自分が考えていることや思っていることを発言する段階にすら踏み込まない状況がある。スマホの弊害で「分かん」ことがあっても、検索をかければ答えが出てきてしまうので、「分かん」ままで過ごせていける世の中になってきているのかもしれない。

(委員)

- ・高知の人は、家族だけクラスだけという小さいコミュニティでしか過ごしておらず、ポテンシャルはあるのに小さくおさまっている。多様性に触れる機会がないのではないか。

(委員)

- ・考えるのが面倒なので新たなことをやるのを避け、経験したことがある方を選択する傾向があると思う。

(委員)

(例) 地域おこし協力隊の講演活動での話

- ・中学校や大学での講演後、質問はありますか？と聞いても、その場ではなかなか手が挙が

らないが、後日のアンケートは沢山意見や質問が返ってくる。それはそれで成長軸が表面にあらわれてきている部分ではあるが、おそらく回答は本人の中で持っているのに、それは別にみんなの前で共有しなくてもいいだろうというキャラクターになってしまっている。きちんとした回答を持っている人も一定数いるのに、ディスカッションする場がないことがもったいない。

(委員長)

- ・第1章に家庭教育の部分と若者論を加える。

(委員)

- ・具体例が問題の本質として若者の地域参加の議論につながってくると面白いのではないかな。

(委員)

- ・私たちの世代でも、失敗してもいいという感覚を学校現場の中では特に感じてこなかった。地域活動や社会教育の場で、大人に失敗していいんだよと受け止めてもらえたことは、本当に尊い経験になった。

○提言について、2つの大きなポイント

- ・陸の孤島で都会との教育環境の差がある状況だからこそ、機会やきっかけがすごく重要になる。高知県の場合、学校現場とも連携し、学校以外の現場へ出ていくことについてハードルをもっと下げていくことが、様々な人が社会教育に参加する機会ときっかけになるのではないかな。
- ・高知県ならではの狭いコミュニティのよさ、コミュニケーションのとりやすさ。高知の若者は、出会いでマッチングアプリを利用すると友達の友達にすぐつながるので嫌・怖いという人が実は多い。
→逆にこのことを利用すると、この令和の時代でも、高知県であれば狭いコミュニティを生かした人との触れ合いが可能なのではないかな。
教育環境の差を機会ときっかけで埋めて、都会にはないコミュニケーションの取りやすさを押していくような提言をし、実際の現場の状況を高知県の上の方々に知ってもらいたい。

(委員長)

- ・**施策の方向性**に「教育環境の差を機会やきっかけで埋めていく」という文言を加える。

(委員)

- ・第1章では、実際に社会教育活動をしている人たちの現場の声として、具体例を羅列して現状を説明したほうが、より読み手の興味を引くのではないかな。それに対する先行研究で論証ができるものがあれば、それも加えつつ仮説を出す形で構成したほうがいいのではないかな。

(委員)

- ・具体例について深く語る必要はなく、こういう現象・現状があるからこそ、こうしていったほうがいいとすれば、我々が提言している第2章につながってくると思う。

(委員)

○プロジェクトを企画しても参加する子どもがいない現状

- ・義務教育段階で繰り返し学んできたテーマだと参加したまらない。テーマ設定の工夫が必要。
(例) ふるさと愛、防災

- ・議論をして一つのものをつくり上げていくというプロセスが、参加するハードルを高くしている。(座学でただ聞いているだけであれば参加する)。
- ・社会教育活動は様々なところからのインプットを、またアウトプットしていく活動だと思うが、そもそも議論を展開させて何かをアウトプットすること自体に抵抗がある。

(委員長)

- ・現場の声はどのように集めていくか。
- 少数ではあるが、このメンバーで話した具体例でいいのではないか。

(委員)

- ・ワークショップの形骸化
- 地域おこし学校でも同じことを毎回やっているが、それを脱して新しいことをしないと人は来ない。高知市としても考え方、指向性も含め岐路に立っている。

(委員長)

- ・これまでの本委員会で出てきた具体例と、今日の話の中で出てきた具体例を第1章に付け加える。
- ・若者の定義、人口のグラフや図に加えて、家庭教育の問題や、社会教育の現場でよく耳にする、若者論を盛り込み、第1章をさらに厚くしていくような形にしていく。

第2章についての検討

- ・第2章に関しては、発表の概要や逐語録の部分がまとめられているような内容になっている。
- (1) 子どもの育ちと学校の役割：川上委員、久寿委員、三谷委員、佐竹委員
- (2) 若者が活躍できる環境と地域の役割：眞鍋委員、徳増委員、岩井委員
- (3) 社会教育への期待：森岡委員、吉田委員

(委員)

- ・5ページ目の、現在の教育制度は140年ではなく150年間に訂正。

(委員)

- ・例えば仮タイトルをつけて、各部門ごとにまとめた書き方はできないだろうか。
- (3) 社会教育への期待では、「青年団活動から見て」「地域おこし協力隊として」というような書き方をしたほうが読み手により受け取ってもらいやすいのではないか。

(委員長)

- ・「(3) 社会教育への期待」の中にさらに小見出しをつけていく。
- で発表者の話ごとに小見出しをつけていくという形で、次回事務局案を提案する。

(委員)

第2章について

- ・最初に結論があり、それをもとに具体例としてまとめていくような書き方はできないだろうか。
- (案) 結論⇒例 具体例を3つ挙げて説明する
- (案) 課題の提起⇒それに対する取組⇒結論
- ・個人の発表ごとにまとめるよりも、全体の議論の中で出てきた話を、それぞれのテーマに合わ

せて収めてまとめたほうが分かりやすいのではないか。

(委員)

- ・第2章(1)(2)(3)の時点で、各委員の1番重要な意見を新聞の見だしのように一言引っ張ってきて、「～を」「～の点で」といった言い方や表現に変えてもいいのではないか。

(委員)

- ・各提言がきれいに結論としてまとまっている必要性はないのではないか。
(案) 第1章で挙げる課題に向けて実際に〇〇の取組をしているが、実際の現場では〇〇のような問題点や課題が新たに生じている。だから〇〇のように取組む必要性があるのではないか。
- ・読み手側に共感してもらえる構成。
(例) この人にアクセスしたら一緒に問題を考えられるのではないか、というきっかけにつながる提言。

(委員長)

- ・事務局との打合せで、各委員の提言を解体し、再構成してまとめるのは難しいという結論になり、各委員の提言を2章の節や項という位置づけで作成しているが、読み手のことを考えると、現状は極めて読みづらいというのは否めない。
→こまめに見だしをつけて整理する。
→各委員の提言は、活動の概要を紹介し、若者の現状に対する課題意識と、未来に向けての提言というような、三つの柱で構成し整理する。

(委員)

- ・匿名でもいいので、どういう立場の人がこういう事例を実践しているのかが分かるような形で入れておけばいいのではないか。
- ・(1)(2)(3)の、何の課題に対して何を議論し発表したのかというところを明確にする。
(案) それぞれの事例から言える結論や提言を最後に書いて、第3章でまとめるような形にする。

(委員長)

第3章について

- (1) の施策の方向性：これからの若者の地域参画をつくる社会教育施策に関して、どのような方向性で進めていくべきかということで6点ほど挙げている。
- (2) 施策の推進方策：施策を進めていく上での方策が、16ページからの部分で、6点ほど挙げられている。それぞれの目的と具体的な取組ということで、(1)よりも具体化した内容でまとめている。

今回の会議で出た第3章(1)に関わる意見

- ・教育を変えるところで多様性や選択肢をつくる。
- ・教師の在り方や、教育方法を変えていく。
- ・教育環境の差を機会やきっかけで埋めていく。

第3章（2）施策の推進方策

- ・県や県内の市町村、あるいはNPOや民間の団体が取り組んでいる具体的な事例を挙げる。
（例）推進方策の3番：高知市内のNPOが取り組んでいる「こうちこどもファンド」の事例
推進方策の6番：香美市の「よってたかって生涯学習フォーラム」の事例
- ・県の施策を盛り込むとともに、県内の市町村、あるいはNPOや民間の団体の優良な事例の名前だけでも出していきたい。

（委員）

- ・このような取組を知らない県民や市民が多いので、この場で事例を出してあげるといいと思う。
- ・教育現場でも地域でも、高知のよさを柱にして共同してつながっていくと、自然にふさと愛が育ち、自信も持てるようになるのではないかな。
- ・人・食・自然という高知にしかないものが沢山ある。高知にはなにもないと劣等感を抱く子どもや親に、何もないのがいいというところをもっとアピールしていくといいのではないかな。

（委員）

- これからの学校教育や社会教育における人口減少のプラスの側面
 - ・より手厚い教育を受けられるチャンスが生まれる。
 - ・全てが自分たちが掌握できるサイズ感になり、子どもたちが社会課題を見出しやすい環境が生まれる。
- 高知県のもつ強み
 - ・人の顔が見える、名前が分かる、どこの誰なのかが把握できるという環境。
 - ・自分で考えて行動ができる教育をすることができる環境。
 - ・思いついたことに対していろいろな人が参加し、実行することで、何かを実現して結果が見えるということが気軽にできる環境。
→人口減少や地域の衰退を逆手に取った、高知ならではの独自性ある教育という面を打ち出したほうが面白いのではないかな。

（委員）

- ・高知県の教育・社会教育は面白そうと思ってもらえると、移住も増えてくるのではないかな。

（委員長）

- ・この提言の読者は、主に県内の社会教育に携わっている行政関係者が多いが、可能であれば小学校・中学校にも配付し先生方に読んでもらいたい。
- ・この提言の第一の読者は教育長。教育長に読んでもらい、県の教育政策、特に社会教育に関わる政策にいかしてもらい、参考にしてもらうという趣旨が念頭にあるため、施策の方向性や方策を結論としている。そのため、実現するかどうかは別問題ではあるが、県の教育長に伝えたいことも検討していきたい。

（委員）

- ・16 ページに事例を入れる。
固有名詞を入れることで、読み手が「こういう団体活動があるのなら自分で調べてみよう」と、次のステップに進むきっかけになることが大事。

- ・以前他の委員も言ったように、地域のおんちゃんおばちゃんによくしてもらった経験があるから、若者が大人になったとき自分も地域に還元しようと思えるのだと思う。

自身の感覚であるが、自ら青年団や地域社会に飛び込んでいける自然型の人は、50人に1人いればいいかぐらいの少なさのため、大人が積極的にきっかけや機会を設定していかないといけない。

- ・子どもの運動能力、身体能力の低下について。

我々の子供の頃と比べ、今は自然体験にしてもスポーツにしても自ら飛び込んでいく子どもが少なくなった分、運動能力や身体能力の低下につながっている部分があると感じる。

→大人がきっかけをつくり、機会を設定していくことが必須な時代になっている。

(委員長)

- ・機会やきっかけの重要性という点については、施策の方向性として位置付けていく。
- ・施策の方向性や推進方策の中に、身体能力、運動能力、いわゆるスポーツに関わる部分があまり出てきていなかったのも、これも一つどこかに位置づけたほうがいい内容だと思う。

(委員)

- ・お膳立てされたきっかけだと、多分若者は乗ってこない。こちらが意図をもってこれをやってほしいというものと、子どもや若者が逃げていくという現状がある。

→主体性を育む教育が1番大事。自分から主体的にやるきっかけをつくるための仕掛けを親や私たちが築き上げなければならない。

(委員長)

- ・第3章に関してはやはり1番難しい部分でもあり、全体を通して見ていかないと意見も出しづらいため、今日のところはここで一旦終わりにする。
- ・次回の会議では1週間、2週間ぐらい前には会議資料を配付予定。効率よく話し合いを進められるよう、各自資料を事前に読み込んで、あらかじめ意見を考えてきてほしい。

(事務局)

次回の予定については、日程調整後10月に第7回の社会教育委員会を実施する予定となっている。

【その他】なし

3 閉会 (11:55~12:00)

【事務局長閉会の挨拶】